

コールセンターからの小さなよみもの

2018年8月31日

Vol.115

金利

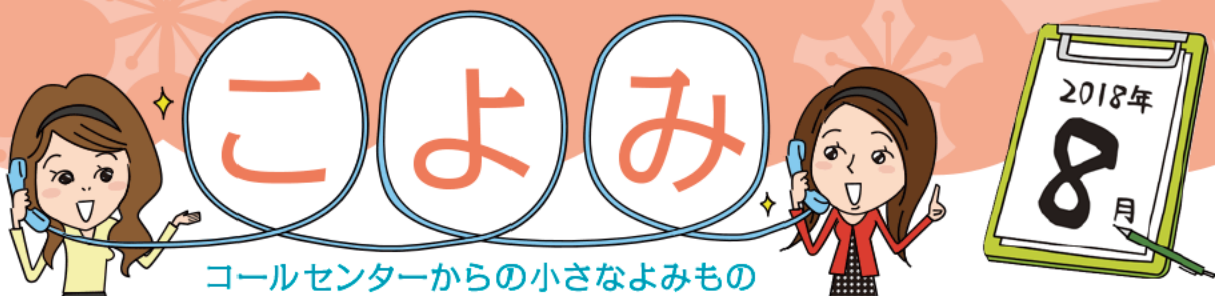
“長”と“短”が逆転する？

米国では、大型減税による効果などの後押しもあり、4-6月期の実質GDPが約4年ぶりに高い成長率を記録するなど、景気の良いさが伝えられています。その良好な景気を足掛かりに、政策金利の引き上げが行なわれており、その政策金利の影響を受けやすい短期金利も上昇傾向にあります。

一方で、長期金利は3%を挟んだ動きが続いており、短期金利と長期金利の差が縮まっています。

そこで今回は、「長短金利差」について押さえていただきたいと思います。





一般的に債券は、長期債の金利が高く、短期債の金利が低い傾向にあります。それは、同じ発行体であれば、保有期間が長ければ長いほど価格変動や信用リスクが高まる可能性があり、その分、金利を上乗せしていると考えられているからです。

また、債券の金利は、保有期間による上乗せ分だけではなく、将来の短期金利の行方がカギを握ります。例えば、長期債金利は、償還までの短期金利の予想値の合計とも考えられ、市場参加者が将来の短期金利が上昇すると予想した場合、長期金利は上昇する傾向にあります。

一方、短期金利は、金融政策の動向に左右されやすい傾向があります。米国では2015年12月以降、連邦公開市場委員会(FOMC)において政策金利(フェデラル・ファンド・レート)の段階的な引き上げが行なわれています。そういったなかで短期金利は上昇しやすい状況にありますが、FOMCのメンバーが示す見通しによると、利上げも終盤に差し掛かっているのではないかと推察され、長期金利が上昇しにくい状況にあります。

実際、8/24時点の米国2年物国債の利回りは2.62%、10年物国債の利回りは2.81%で、その差が縮まっています。

過去の経験において、短期金利と長期金利が逆転するとしばらくして景気の落ち込みが見られたことから、長短の金利差は景気の先行きを示す1つのシグナルとして市場では捉えられており、意識されています。

一方で、米国の経済指標は力強いものが多く見られることから、景気の先行きに対して強気の見方をするエコノミストもいます。

長短金利差は、今後の景気の先行きを見通すうえでの道しるべの1つになりそうです。



nikko am



コールセンター

0120-25-1404

営業時間 平日 9:00~17:00